

各関係機関・団体長 様

愛媛県病虫害防除所長

病虫害防除技術情報（第 8 号）の送付について

このことについて、次のとおりお知らせしますので、御参照の上、防除指導方よろしく
お願いします。

記

1 情報の内容

トビイロウンカの発生状況（8月下旬～9月上旬）と今後の防除対策について

2 発生状況

(1) 広域調査における発生状況（表 1）

8月下旬から9月上旬にかけて県下全域を調査した結果、県全体の発生圃場率は
12.0%と平年（22.1%）よりやや低く、10株当たりの成幼虫数も0.9頭と平年（13.4
頭）より少ないものの、一方で、10株当たりの成幼虫数が100頭以上に達している圃
場も一部に認められている。また、短翅雌成虫の県全体の発生圃場率は3.6%と平年
（14.0%）より低い、南予では高い傾向にある。

(2) 過去の発生状況との比較（図 1、2）

多発した平成 25、26 年、甚発生であった令和元、2 年と比較すると発生圃場率は低
いが、それ以外の年次と比較すると発生圃場率は高い位置にあり、短翅雌成虫の発生圃
場率もやや高い傾向にある。

(3) 本年 9 月上旬に坪枯圃場（写真 1、2）が確認されている。

3 今後の対策と注意点

令和 4 年 8 月 25 日付け病虫害防除技術情報（第 6 号）の発出以降、発生密度の急激
な増加は認められないが、調査圃場ではトビイロウンカの発生が確認される事例が続い
ており、中晩生品種の圃場では広く生息している可能性がある。このため、中晩生品種
では、9月下旬以降の発生に注意が必要である。

(1) 本田移植時にトビイロウンカに登録ある育苗箱施用剤をしていない圃場や、トビ
イロウンカに対して感受性が低下している殺虫成分を含む薬剤を処理している圃場
では既に発生密度が高まっている可能性もあることから、発生状況によっては収穫
前の追加防除を実施する。

(2) 効果の高い殺虫成分を含む育苗箱施用剤を処理している圃場での発生密度は低い
傾向であるが、黄化症状等の変化には十分注意する。

(3) 発生は圃場間差や、圃場内での偏りがあるため、圃場全体を注意して見回り、黄
化症状などの変化を見逃さないよう注意する。

(4) 薬剤は、本虫が生息する稲の株元に十分届くよう丁寧に散布する。



写真 1 坪枯症状（本年確認）



写真 2 株元の被害状況

表1 広域調査におけるトビイロウンカの発生状況

地域	調査圃場数	発生圃場数	発生圃場率(%)	成幼虫数/10株	短翅雌成虫発生圃場率(%)
東予	256	36	14.1	1.3	3.5
中予	304	26	8.6	1.0	2.3
南予	31	9	29.0	0.5	16.1
県全体	591	71	12.0	0.9	3.6
平年	690	150	22.1	13.4	14.0

1) 平年値はH24～R3の10年平均

2) 調査は、8月下旬から9月上旬に実施

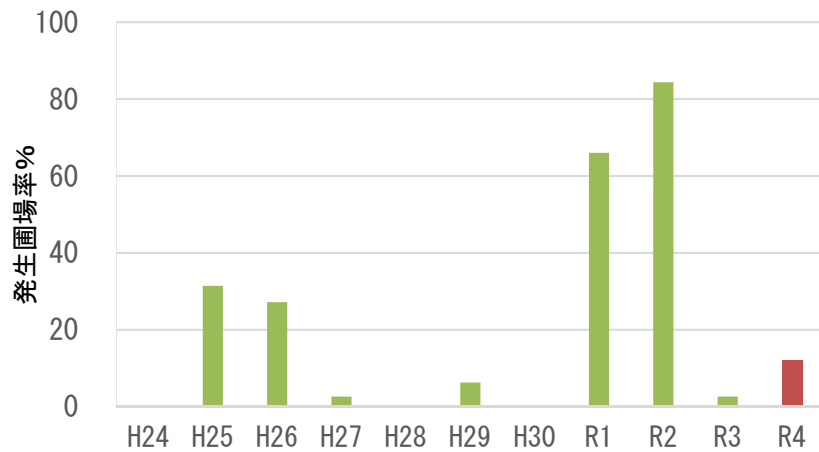


図1 トビイロウンカの年別発生推移 (8月下旬～9月上旬)

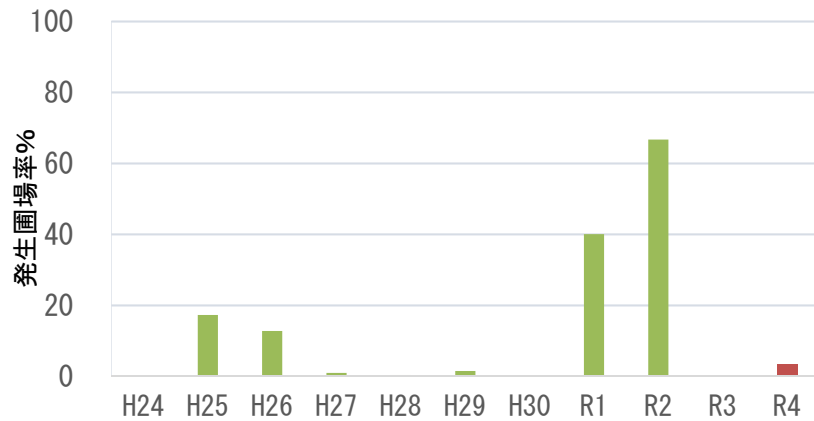


図2 短翅雌成虫の年別発生推移 (8月下旬～9月上旬)